『南山神学』40 号（2017 年 3 月）pp. 177-190.

日常的な聖霊の経験の再考

―ラーナーの論考を手掛かりに―

鳥巣　義文

序

私たちが日常生活の中で神の霊である聖霊を経験するとは，いったいどのようなことなのであろうか。この関心事項について，カール・ラーナーが Erfahrung des Heiligen Geistes（聖霊の経験）という表題の下に興味深い論考を著している[1]。その導入部分において，彼は新約聖書の使徒言行録に描かれた聖霊降臨と呼ばれる出来事を示唆し，そこで人々に与えられ，力と慰めと自由をともない終末まで人々とともにある聖霊が神の自己譲与の賜物に他ならないと簡潔に前置きしている。これはキリスト者の証言としては十分な示唆ということになろうが，もう少しその内容を考えてみたい。

１．「救いのフロント」というアプローチ

そもそも筆者自身は今を生きる私たちが日常的にどのように神のはたらきかけを把握するに至るのかを論じた折に，父と子と聖霊とからなる三位一体の神

---

[1] この論考については次の邦訳がある。カール・ラーナー「霊の体験」後藤憲正（訳）『神学ダイジェスト』55 号（1983 年）5-23 頁であり，これは以下「体験」と略記する。この邦訳が使用した原文を入手できなかったので，本稿では次の新しいラーナー全集第 29 巻に収録されたドイツ語版を参照している。したがって，全集の中の原文が旧版に比べてどの程度の訂正版となっているのかは確認していない。“Erfahrung des Heiligen Geistes,” in: Karl Rahner, *Sämtliche Werke* Band 29 (Herder: Freiburg/ Basel/ Wien 2007), S. 38-57. これは以下 Erfahrung と略記する。ちなみに，筆者は Erlebnis というドイツ語を体験，Erfahrung を経験と訳し分けることがあるが，煩雑さを避けるために本稿では引用に際して既存邦訳の表記にできるだけ従いたい。

のうちの聖霊のはたらきこそが肝要であるとして，人々への聖霊のはたらきかけを神による「救いのフロント」または神から人々への「触発」として説明した[2]。

聖霊のはたらきをこのように神から人々へ向けられる救いのわざの最先端の出来事として筆者が論じる背景には，日常生活における聖霊のはたらきについて，それが私たちには隠されたものであり，認識できない事柄であると論じるような傾向に対して異論があるからである[3]。そこで筆者は，哲学者エドムント・フッサールの現象学（Phänomenologie）において説かれた意識の「志向性」（Intentionarität）と対象からの「触発」（Affektion）との間の関係理解に示唆を得ながら，それらの概念を神と人々との間の恩恵に満ちた神学的な関係把握に応用することを試みた[4]。

そして，要約的な鍵語として提案した「神と人々との我々」すなわち救済史上に実現する「神と人々との交わり」という表現に凝縮された私たち人間の恵み深い救いの現状において[5]，人間に対して超越的でありながらも，同時に人間に内在する神の救いの営みが私たちに体験され得ると論じた。これは一見して理屈を超えた語り口のように感じられるかもしれないが，キリスト教信仰に則してみれば，聖書の中に証言されている人々の諸体験であり，また現代の私たちにも現実に体験可能であるような躍動的な神と人々との間の恩恵に満ちた関係把握のことである。そして，これと同様の関係把握が古代教父エイレナイオスに見出される神の両手による教導とそれに応える人間の成長の理解に認められること，さらに現代の神学者ラーナーの提唱した神の自己譲与と人間の応答という神と人々の関係説明にも同様の内容が指摘されているということを指摘した。

---

2 鳥巣義文「聖霊による触発――三位一体の神による救いのフロント試論――」『日本カトリック神学会誌』第 12 号（日本カトリック神学会，2001 年）65-88 頁。

3 上掲論文，67-75 頁。

4 上掲論文，75-86 頁。

5 鳥巣義文「神と人々との我々――三位一体の神による救いの現実についての一考察――」『南山神学』第 24 号（2000 年）45-76 頁，特に 74 頁。

哲学の「土俵」にとどまろうとする現象学とは違い，筆者のアプローチでは人間の能動的意識作用の優位性を主張しないがゆえに，フッサールの現象学において過小評価されている受動的概念である触発の方が，神と人々との交わりを理解するに当たってむしろ根本的なはたらきと捉えられる。それというのも，キリスト教神学の恩恵論や救済論において明示されているとおり，神と人々との交わりにおいて主導権を握っているのは人々に救いの手を差し伸べる神の側だからである。私たち人間は，そこでは，神から与えられるさまざまな救いのための触発に応える存在として捉えられている。

本稿では，ラーナーによる聖霊の経験をめぐる論考を検討することをとおして，再び，聖霊の神の「救いのフロント」としての捉え方について考えることにする。

２．聖霊の経験をめぐるラーナーの論考

さて，以上に素描した神と人々との関係把握のモデルを念頭に置きながら，次に，ラーナーが著わした前述の論考「霊の体験」に注目したい。

この論考において，ラーナーは私たちの日常的な体験を分類し，神の霊の体験がどのような内容であるのか，また，そのような体験をすることのできる人間が神に対してどのような存在なのかを確認することから始めている。

２．１．主題化されない日常的経験

ラーナーによれば，私たちの社会や環境の個別的な現実によって規定される個別の諸体験（Einzelerfahrungen）がある一方で，それらとは全く異なる，「私たちが有する諸体験の日常的営みの中に決して主題化されることのない体験」（eine ganz andere, im Alltagsbetrieb unserer Erfahrungen gar nicht thematisierte Erfahrung）もあるという。この主題化されることのない体験についてラーナーは，私たちが「日常体験の多様さの中におぼれ，自らの主体性を忘れてしまうように思える場合でも，この体験は存在する」と断言しており，さらにすべての具体的な個別体験の背後に与えられている「主体の原体験」

（Urerfahrung des Subjekts）とも言い換えている。そして，この原体験は，「個別的な現実からもたらされる日常体験と同一基準で計ることはできず，また，たとえそれが見過ごされたとしてもいつも必ず与えられている」ものであり，いわば「主体の自己所与」（die Selbstgegebenheit des Subjekts）に他ならないと説明される[6]。

ここに言及される「主体の自己所与」とはどのようなことを指しているのかを確認したい。フッサール現象学の理解を借りれば，この Selbstgegebenheit は「対象が有体的に，つまり生き生きと与えられていることを意味する。対象についての明証的体験の特徴を表すフッサール独自の表現」[7]である。これは身近な一般的言い回しとしては，自分自身が捉えている「実状」や「現状」のことといえる。ラーナーの文脈では，それがあまりにも身近なので，ことさら主題化されることのない体験のことである。

そして，ラーナーは聖霊の体験もちょうどこの「主体の自己所与」のように，全ての個別的諸体験の中でいつも見過ごされがちなものであると説明して，聖霊の体験を「主体の原体験」のあり方へと関連づけている。

要するに，以上に指摘された「主題化されることのない体験」とは，人間の現状，当たり前の実状のことであり，「霊の体験」も同じような日常的経験として捉えられている。このことについて，キリスト者としてのラーナーは，聖書の証言に見出されるような聖霊の体験を，私たちにも体験することが可能であり，それは私たちの自由に必然的に提供されている（Wir [können] eine solche Erfahrung des Geistes haben, ja sogar als Angebot an unsere Freiheit notwendig haben.）という[8]。

---

6 以上について「体験」7 頁参照；Erfahrung, S.39-40. なお，本稿の「主体の原体験」の「主体」は上掲ドイツ語版から補足した。「主体の自己所与」も同様。

7 日暮陽一「自体能与／自体所与性」，木田元／野家啓一（編）『現象学事典』（弘文堂，1994 年）1951 頁参照。

8「体験」，10 頁参照；Erfahrung, S.43-44. この聖書の証言に基づく私たちの聖霊体験の可能性について，鳥巣義文「聖霊の経験――聖書の描く神の躍動性について」『南山神学』第 26 号（2003 年）1-31 頁にて論じた。

２．２．超越する人間と包括する神

それでは，以上のような経験をするこのことできる人間は神秘である神とどのような関係にあるのだろうか。ラーナーの考えを確認しよう。

ラーナーは，人間がその認識と自由とにおいてどのような本質構造を持つのかを説明する際に，「認識し自由であることにおいて，人間は不可避的に超越の存在である」[9]という。ここに出る「超越の存在」（das Wesen der Transzendenz）という表現について，ラーナーの論考の邦訳者後藤憲正は訳文中に適切な補足をし，それを「絶対的な超越的存在，すなわち神に向かって超越してゆくことを本質とする存在者」と説明している。

ラーナーによれば，周りの個別的対象に関わる私たち人間の精神活動は，それらの対象を目指しつつもその対象を超えて行く。そして，名づけられるものとして対象的に意識されたものは，まだ名づけられず沈黙の内に現存する地平においてこそ把握されるのである。このような状況について，ラーナーはいくつかの言い換えをもって説明している。すなわち，私たちの社会や環境において私たちに名づけられながら私たちと遭遇する対象は，「無限で名づけ難いものへと向かう途上の一段階」でしかないと。あるいは，私たちの日常的ないし学問的意識に与えられているものは，「名づけ難い神秘の無限な海の只中にある一つの小さい島」でしかないと。あるいはまた，私たちが作った概念や用語は「ちっぽけな標識であり，偶像」であり，そうしたものは「神秘のすさまじい体験，根源的で非主題的であり，黙しつつ自らを与え，与えつつ黙して語らぬ体験を，いつも私たちに新たに思い出させるよすがとなっている」という。要するに，私たち人間の「無限な神秘を指向してやまないこの体験」は「日常的な認識と意志とを可能にする必須の条件」である。このような「超越体験は，人間が日常生活の只中にありながらいつも，既に自分自身や，自分がかかわっている個々の事柄を超越する体験」なのである[10]。

---

[9]「体験」11 頁参照；Erfahrung, S.44: In Erkenntnis und Freiheit ist der Mensch unausweichlich das Wesen der Transzendenz.

[10] 以上について，「体験」11-12 頁参照。

このように，ラーナーにとって人間とはその本質において神秘ないし神を指向する存在である[11]。

それでは次に，神についてどのように語られているかということであるが，以上の検討内容からも推察されるように，神は人間が名づけたり秩序づけたりする諸々の体験の一部ではない。むしろ「神はすべてを包括する者であって，決して他から把握されるものではなく，私たちの体験やその諸対象の前提である」という。人間は神へ向かって超越する存在であるゆえに，私たちは周りの対象を名づけつつ神秘を目ざすのであるが，実のところ，全てを包括する神の無限の内にあって，日常を生きているということになる。そこで，ラーナーは「超越論的な体験は，いついかなるところでも必ず，ある具体的で事象的な対象を通して取り次がれるが，それはまた，常に日常生活の只中にある神体験なのである」と述べるのである[12]。

ところで，使用されている用語について確認したい。ここに見出される「超越論的」（transzendental）という表現は，ラーナーが好んで用いる用語である。それは「人間のメタ歴史的（metahistorical）で，アプリオリな性質を指す」言葉であり，そのような人間は存在を問い求め，それにより自らを「無限の地平にある存在」また「神の神秘へ開かれたもの」として経験する存在者として捉えられている[13]。たとえば，フランシス・シュスラーフィオレンザのような研究者は[14]，ラーナーが超越論的経験を語る際にはそれを神についての経験として語っていると指摘する。そして，この点においてラーナーは，類似した用語を

---

11 神学的人間論を概括するには，次のアントン・ロジンガーによるラーナーの人間論研究が示唆的である。Anton Losinger, *Orientierungspunkt Mensch: Der anthropologische Anzatz in der Theologie Karl Rahners*, EOS Verlag: Sankt Ottilien, 3. Auflage 2016.

12 以上について，「体験」12-13 頁参照。

13 Declan Marmion and Mary E. Hines (ed.), *The Cambridge Companion to Karl Rahner*, Cambridge: Cambridge University Press. 2005, glossary, xiii-xv. これは，以下 Companion to Karl Rahner と略記。

14 Francis Schüssler Fiorenza, Method in theology, in: Companion to Karl Rahner, 65-82. 特に，76-77 頁。

使用していても，そのような経験を決して語ろうとしないカントとは非常に意見を異にしているという。

このことは哲学と神学とのアプローチの相違のゆえに当然なこととともいえよう。ラーナーの説くこのような人間の経験の超越論的特徴のゆえに，以下に見るような神体験が可能となるのである。

２．３．恩恵という神体験

神という全てを包括する前提へと超越していく人間のあり方を確認したいま，私たちはラーナーの論考の核心部分に注目したい[15]。

彼は，神へ向かう限界のない超越論的な人間精神の活動（die unbegrenzte transzendentale Bewegung des Geistes auf Gott hin）が，神を，永遠に距離を保ちつつも漸次的に近づき得るような目標としてではなく，直接的に到達可能な目標として持つという。そして，このような「将来の直接的な観照にまで至る自分自身の中での神との直接性へと向かうこの超越論的な活動の根源性を，私たちは恩恵と名付ける」とし，その理由を，「なぜなら，そこにこそ，私たちが恩恵とも聖霊における神の自己譲与とも呼び，さらにその最終的な完成は愛の直接性における神直観のうちに見出されるまことの究極的な本質があるからである」と説明している。

ラーナーは，哲学的には「可能性」と見なされる事柄も，神学的には「現実性」と捉えられるのであり，キリスト者である私たちにとって現実の出来事である「超越体験は，即神体験であり，かつ，すでに恩恵の体験でもある」という。それというのも，「超越体験の根源性と力動性は，私たちの実存の最内奥でこれらの経験のすべてを可能にする神の自己譲与によって私たちが恩恵とか聖霊と名付ける活動の目標と力である神の自己譲与によって担われているからである」と述べる。

そして，筆者が特に関心を持つラーナーの説明は次のくだりである。

---

[15] 以下について，「体験」13-14 頁参照；Erfahrung, S.46-47。ここでラーナーは人間精神の限界のない活動と恵みの賜物についてまとめている。

> 神を臨在させる超越の体験は——神との直接性へとすべての人間を向かわせる神の救済意志のゆえに——，事実上いつも聖霊の体験である[16]。

この考え方に筆者は同意したい。キリスト者として聖霊の体験を説く彼の真意はここにあると考えられる。神が私たちの傍近くに臨在していることの体験が人間の超越の体験と表裏一体をなしており，さらにそのような体験こそが事実上，聖霊の体験に他ならないと明言しているからである。ただし，この発言に続けて，ラーナーは次のようにもいう。

> 聖霊におけるこのような超越論的な神体験は，人間の日常的な営みの中でただ非主題的にのみ与えられ，また，社会や環境の中で私たちがかかわる具体的な現実への対応によって覆い隠されている。聖霊におけるこのような超越論的な神体験は，日常生活の内にあって匿名的で非反省的であり，非主題的である[17]。

このように，ラーナーはあくまでも神体験が非主題的なものであるという自らの立場を堅持する。ここで私たちが留意するべきは，この文脈で「超越論的な神体験」という表現が用いられていることである。既に見たとおり，「超越論的」という語をラーナーは主に人間におけるアプリオリな要因を説明するため

16「体験」13 頁参照。なお，訳文の一部に加筆してある。Erfahrung, S.47: Die Gott anwesend-sein-lassende Transzendenzerfahrung ist faktisch immer (wegen des Heilswillens Gottes allen Menschen gegenüber, durch den der Mensch auf die Unmittelbarkeit Gottes hin ausgerichtet wird) Erfahrung des Heiligen Geistes...

17「体験」14 頁参照。訳文に若干加筆してある。Erfahrung, S.47: Diese transzendentale Gotteserfahrung im Heiligen Geist ist aber im Alltagsgeschäft des Menschen nur unthematisch gegeben, verdeckt und überlagert durch die Beschäftigung mit den konkreten Wirklichkeiten, mit denen wir in unserer Mitwelt und Umwelt beschäftigt sind. Diese transzendentale Gotteserfahrung im Heiligen Geist bleibt im Alltag anonyum, unreflektiert, unthematisch....

に用いている。ここでは，聖霊における神体験が，神秘へと開かれている人間の本質的要因に基づく実状であるゆえに，その体験自体は日常生活においてもことさら主題化されることはないということになる。彼の真意は一つ前に挙げた引用文が明らかにしていた事柄である。次のくだりも同様のことを確認している。

> 日常的な現実は, この超越論的な霊の体験を自分から指示するものであり，その霊の体験はいつも沈黙しまるで無表情のようにみえるが，いつもそこに現に存在している[18]。

つまり，私たちの日常の内に聖霊の体験は現にあるとラーナーは主張している。そして，このような体験に人々の注意が向けられる場合には，それがどのような人々の場合であっても，その体験を引き起こし，受け入れることを妨げてはならないという。なぜなら，霊の体験である日常的生活の中の様々な体験について，ラーナーは任意の多くの事例を取り上げて見せるが，それらのいずれにおいても「そこに神がおり，そこに神の救いの恩恵がある。そこで私たちが体験するのは, キリスト者が神の聖霊と呼ぶ方である（…da ist Gott und seine befreiende Gnade. Da erfahren wir, was wir Christen den Heiligen Geist Gottes nennen.）と考えているからである。そして，そのような体験を「すべてのことに神を見出す，日常の神秘主義」（die Mystik des Alltags, das Gottfinden in allen Dingen）と呼んでいる[19]。

---

[18]「体験」14 頁参照。Erfahrung, S.48: Die Alltagswirklichkeit wird dann von sich aus Verweis auf diese transzendentale Geisterfahrung, die schweigend und wie scheinbar gesichtlos immer dar ist.

[19]「体験」15-17 頁参照; Erfahrung, S. 48-51. 訳文に若干補足してある。「体験」15 頁でも簡潔な言い回しで，日常生活の只中における霊の体験の究極的な深みのことを「霊」と換言している。Erfahrung, S.48: Bei diesen Hinweisen auf die konkrete Erfahrung des Geistes mitten im banalen Leben kann es sich nicht mehr darum handeln, sie einzeln auf ihre letzte Tiefe hin, die eben der Geist ist, zu analysieren.

３．結語

本稿の初めに述べたように，筆者は神学的なアプローチをとっている。したがって，ラーナー自身が「霊の体験」という論考において，アプローチの相違から生じる解釈の特徴や相違を示すために費やした言葉づかいをここで繰り返すことはしない。以下に，若干のまとめと今後の課題を示したい。

３．１．非主題的・秘匿的に臨在する聖霊の確認

神学的アプローチとは簡潔に述べれば，聖書と伝承と教導権とに基づく諸課題の探究法ということになる[20]。人間と神との関係について聖書の啓示に基づき被造物と創造主という関係によって理解するならば，ラーナーの述べる超越の存在である人間が超越する彼方には神が存在するということであり，また人間がそもそも神の創造物すなわち神の似姿に造られているという聖書の啓示からして，人間は自分以外の諸被造物とともにいわば神の手中にある，またはラーナー流に表現するならば，神に包括されているという理解に至ることができる。

さて，私たちが以上にラーナーの論考を確認しながら最終的に辿り着いた要点は，日常生活の中で人々が体験していることの究極点には聖霊そのものが臨在するということである。この結論は，筆者が志向性と触発という鍵語によって説明を試みた「救いのフロント」としての聖霊の理解に方向的に一致しているといえよう。

ここで，聖霊の救いのはたらきをさらに検討するために必要な視点を指摘しておきたい。まず，神の似姿として造られた人間は，その日常生活において隣人愛のわざをとおして聖霊の臨在を証しているといえる。そこからもう一歩展開するならば，その隣人愛の実践者自身の信仰がキリスト教信仰であることを

---

20 神学的アプローチについて要点を紹介するのは，たとえば教皇庁教理省国際神学委員会『今日のカトリック神学――展望・原理・基準』浅井太郎訳（カトリック中央協議会，2013年）23-51 頁。また Frederick C. Bauerschmidt and James J. Buckley, *Catholic Theology: An Introduction*, Wiley Blackwell 2017, 12-27.

も証するものでもあるのかという問いかけが生じる。ラーナー自身も「霊の体験」という論考の中で，このことに関連して自らの考えを述べている[21]。その語りは，よく知られたラーナーの理解を表している。すなわち，イエス・キリストの神は全ての人々の救いを望み，彼らに自らの恩恵を提供している。キリストの恩恵は言語化され制度化されたキリスト教の限界を超えてはたらいている。自分の良心に忠実だがキリスト教の使信に至らず秘跡を受けていない人々でもイエスの復活の神秘にあずかっている，という内容である。この自らの立場をラーナーは固持する。

筆者の場合は，全ての人々への聖霊の臨在を説明するために聖霊が人々の「救いのフロント」に他ならないことを指摘し，そこからもう一歩展開して「神と人々との交わり」という救いの状況について試論を述べている。実はこの状況の根拠と考えている聖霊のはたらきとは，新約聖書でパウロが描く「アッバ，父よ」と人々に叫ばせる聖霊が人々へ内在している状況である。これは，換言するならば，神を父と認める人々の姿であり，既に信仰告白の状況を指している。したがって，筆者にとって本稿では取り扱うことのなかった事柄，すなわちラーナーがパウロの証言をどのように解釈しているのかということの確認が次の課題となる。

３．２．実践への展望

ラーナーの論考の検討により，筆者は日常生活の中の隣人愛の実践が既に聖霊の経験を踏まえたものであるとする彼の観点に非常に親近感を覚えることとなった。それは聖霊の経験の解明に取り組む彼のアプローチが，キリスト者でない人々また自らをエリートとは考えていない普通のキリスト者を念頭に，神の国の奥義を説明しようというものだからである。

そのことは，論考の終わりの方で，彼が「霊の体験」は「しかし人間の生では大抵の場合，明確な黙想や没我体験などにおいて生じるのではなく，普段の

---

[21]「体験」19 頁参照。

生活において，即ち責任，誠実さ，愛などが心から実践されるところに生じるのである」（Das aber geschieht in den meisten Fällen des menschlichen Lebens nicht in ausdrücklicher Meditation, in Versunkenheitserlebnissen usw., sondern am Material des normalen Lebens, dort also, wo Verantwortung, Treue, Liebe usw. absolut getan werden,）と述べ，さらに続けて「その場合，このような行為が明白な信仰的解釈を伴っているか否かという問いは，あくまでも二次的な事柄である」（wobei es sogar im allerletzten eine zweitrangige Frage bleibt, ob solches Tun von einer religiösen Interpretation ausdrücklicher Art begleitet ist）と断言していることからも分かる。また，ラーナーは「新約聖書は，隣人を無私の心で愛し，またそこで神を体験するすべての人々に，神秘家たちによる最高の登攀や最深の没我体験によっても決して凌駕されえない究極的な救いを，神の裁きによって承認しているのである」（...es [=das Neue Testament] erkennt auch allen Menschen, die den Nächsten selbstlos lieben und darin Gott erfahren, jenes letzte Heil im Gericht Gottes zu, das auch von dem höchsten Aufstieg und der tiefsten Versenkung des Mystikers nicht überboten war.）という[22]。

自らの論考において，一貫して，キリスト教信仰の立場を押しつけることのないように配慮しながら論述してきた後に，やっとこのまとめの部分でラーナーは以上のように語るのである。そこにおいて明示化されるのは，わけても日常における神の霊の体験と日常における隣人愛の実践との関係である。

このようなラーナーの締めくくりを受けて，筆者としては，新約聖書のマタイ福音書に描かれた「全ての民族の裁き」（マタイ 25 章 31 節－46 節）のたとえから，イエスの説く神の国の奥義を示唆しておきたい[23]。そこでは，主また王と呼ばれるイエスとその前に集められた人々との間に，次のような言葉が交わされている。

---

[22] ここでは「体験」23 頁から補足なしに引用; Erfaurung, S. 55-56.

[23] 聖書の引用は，『聖書新共同訳――新訳聖書詩編つき』（日本聖書協会，2002 年）による。鳥巣義文『福音と教会あれこれ』（新世社，2005 年）137139 頁も参照。

『お前たちは，わたしが飢えていたときに食べさせ，のどが渇いていたときに飲ませ，旅をしていたときに宿を貸し，裸のときに着せ，病気のときに見舞い，牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると正しい人たちが王に答える。『主よ，いつわたしたちは，飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ，のどが渇いているのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。…（中略）…』そこで，王は応える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは，わたしにしてくれたことなのである。』（25 章 36 節－40 節）

人々が日常生活の中で普通に行っている隣人への愛のわざにおいて，人々の超越の体験が実現している。ラーナー流に換言するならば，そのような日常の主題化されていない体験において，既に神の霊がはたらいているということであろう[24]。

筆者としては，新約聖書の福音書が描くイエスの教説の中には，ラーナーの超越論的な神体験の立場に批判的な研究者でさえも[25]，無視できない箇所があることを再確認しておきたい。その一つは，上述の「全ての民族の裁き」のたとえにおける隣人愛の実践の事例である。そこにおいて救いへと招かれた人びとは，イエスに説明されるまで，自分たちが行っていた愛のわざの意義を認識していなかった。

もう一つは，ヨハネ福音書 10 章 14 節－16 節の「良い羊飼いであるイエス」のたとえである。ここには，16 節のみを引いておく。

わたしには，この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かな

---

24 さらなる聖霊の経験をめぐる検討のために，レナーテ・ケルンのラーナーの聖霊論研究が示唆的である。Renate Kern, *Theologie aus Erfahrung des Geistes. Eine Untersuchung zur Pneumatologie Karl Rahners*, Tyrolia-Verlag: Innsbruck/Wien 2007.

25 たとえば，ポール・D・モルナーがいる。Paul D. Molnar,“Love of God and Love of Neighbor in the Theology of Karl Rahner and Karl Barth,“ in: *Modern Theology* Vol. 20, Blackwell 2004, 567-599.

> ければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして，羊は一人の羊飼いに導かれ，一つの群れになる。

このくだりでは「囲い」が「教会」を意味すると解釈する場合には，まず，その囲いの外にも羊飼いであるイエスの声を聞き分けることのできる羊がいると語られていることが注意を引き，さらに，羊飼いの導きによって終わりには囲いの内と外の双方の羊が合流して一つになるといわれている点が興味深い。

そして，同じヨハネ福音書 3 章 1 節－9 節の「水と霊による新生」の教えの中の 8 節の言葉である。

> 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても，それがどこから来て，どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。

ここでは風すなわち霊が自由にはたらくということ，また，人は霊がどのように動くのかを知らないと述べられている。

以上のように，隣人愛を実践している人々，羊の囲いの内側にいる人々，霊から生まれた人々，これらの人々のいずれもが自分たちの行いやおかれている現状，また自分たちにはたらく聖霊についての自覚なしに生活しているということである。これらの福音書内のイメージをどのように解釈していくかは，今後の課題としておきたい。